

子ども食堂はどこに向かうのか

私見では、子ども食堂は、食を通じて人と人との間のつながり、居場所を創り出すボランティア活動である。2022年は、「子ども食堂」を名乗る場＝活動が、この日本に誕生して10年となる。また、子ども食堂に不要不急を避けるよう促すコロナ禍の圧力が働き始めて3年目を迎える。これほど子ども食堂という場＝活動が必要とされる時期もなかったが、コロナ禍において全国で一斉に始まったのはフードパントリー（食材配布）活動であった。しかし、フードパントリーは三密を避けるために編み出された活動のレパートリーだが、結果的に「居場所なきフードパントリー」とは言い得て妙である。コロナ禍後、フードパントリーは一種の文化的ラチュエット（歯止め）となり、後戻りせず、活動のレパートリーとして定着するのか。それとも、コロナ前の会食型の子ども食堂に回帰するのか、あるいは、コロナ禍を期に、分岐し、様々な形のハイブリッド（混合）を生み出ていくのか。こういった子ども食堂という場＝活動のあり方を決めるのは何か。人々の居場所を守っていくにはどうすればよいのか。こういった問いを抱えながら、私たちは子ども食堂の現場で関わり続け、そこで気づいたことをデータ化し、その意味を言語化した。

第Ⅰ部「子ども食堂が教えてくれたこと」では、これまで長期間、関わり続けた子ども食堂が気づかせてくれたことを様々な角度からアプローチした。課題はあるものの、それぞれ、濃密な記録となった。第Ⅱ部「みんなの居場所を守っていきたい」は、愛知県内の約20か所の子ども食堂を対象としたインタビュー調査と、各自が参加している子ども食堂への長期の参加経験をもとに、コロナ禍が子ども食堂にどのような影響を与えているのかを明らかにした。とりわけ、子ども食堂の誕生時には、一堂に会し、食事する会食型が主流であったが、コロナ禍以降は食材を配布する活動形態に変化している。これにより、子ども食堂が本来持っていた居場所としての機能にどのような変化が生じているのか、また、コロナ禍後の居場所機能を高めていくためにはいかなる方策が必要であるかを提示しようとした。第Ⅲ部「これから取り組みたいこと」では、子ども食堂においてフードパントリーが中心となってから、食材のマッチングシステムをいかに構築するかという課題が浮上した。これから愛知、岐阜、三重の広域圏で小規模のものを積み重ね、多重の食材のマッチングシステムを作り上げていく活動に関わっていきたく願っている。

「居場所は人、地域は日常」という。居場所は施設なども大事だが、究極的には人である。どんな人がいるのか、中心にいる人だけでなく、何もしない、ただ居るだけのような人も含めてそこに集う人が大事である。地域社会には、月一回のお祭りのような子ども食堂も必要であるが、日頃、困ったら立ち寄ってひと時を過ごし、必要であれば食料支援も受けられる、そういった地域社会における日常的につながる場が必要である。

見知らぬ子どもから子育て中の母親、高齢者までが集い、家族機能のシンボルのような「食」を共にする子ども食堂、大人も含めて誰でも集える地域の居場所となった。コロナ禍を経て子ども食堂はどこに向かうのか、これからも伴走しながら記録していきたい。今年度も、現場の方々に深く御礼申し上げたい。不十分なところ、言葉足らずのところ、たくさんあるが、取り急ぎ、2021年度のご報告とさせていただきます。

2022年2月17日
成 元哲

われらのこどもプロジェクト

<https://warera-kodomo.jimdofree.com/>